

特集

鳥羽の火祭り

千二百年の伝統を守る天下の奇祭



1200年余りの歴史と伝統を誇り、天下の奇祭として知られる「鳥羽の火祭り」。夜空を焦がす巨大な松明「すずみ」の中から「神木」や「十二縄」を福地・乾地のどちらが早く取り出すかにより、その年の天候などが占われます。平成16年には国の重要無形民俗文化財に指定され、全国的に知名度が高まりました。

今号では、鳥羽の火祭りの見どころなどを写真と共にお伝えします。今年の祭りは2月12日(日)に開催されます。激しい炎と熱い男たちが繰り広げる祭りの迫力を、ぜひ現地で体感してください。

祭りの歴史

祭りの起源は、記録などの焼失のため不詳ですが、鳥羽神明社が創建されたとされる1200年前(大同年間)ごろから火祭りも行われていたと伝えられています。以前は旧暦の1月7日に行われていましたが、昭和45年からは、2月の第2日曜日に祭りが行われるようになりました。

昭和初期ごろに作成された『三河鳥羽神明社(火祭) 正月七日 社務所発行』の写真アルバムには、現在とほとんど変わらない祭りの様子が記録されています。

祭りの中心、神男

祭りの中心となる「神男」は、福地と乾地から1人ずつ、原則25歳厄の若者が選ばれます。鳥羽神明社の西を流れる水路(地元では宮西川と

呼ばれる)を境に鳥羽地区を東西に分け、西は「福地」、東は「乾地」と呼ばれています。今年の神男は福地が鈴木聖規さん、乾地が立川浩樹さんです。神男は祭りの3日前の夜から社務所にこもり、朝7時と夜7時に桶5杯の水をかぶるなどして、身を清めます。

前年の神男のことを「添え棒」といい、その年の神男を補佐し、指導します。祭りで駆使する「ゆすり棒」の操作を介添えるなど、神男の全ての面倒をみます。

ネコと呼ばれる奉仕者

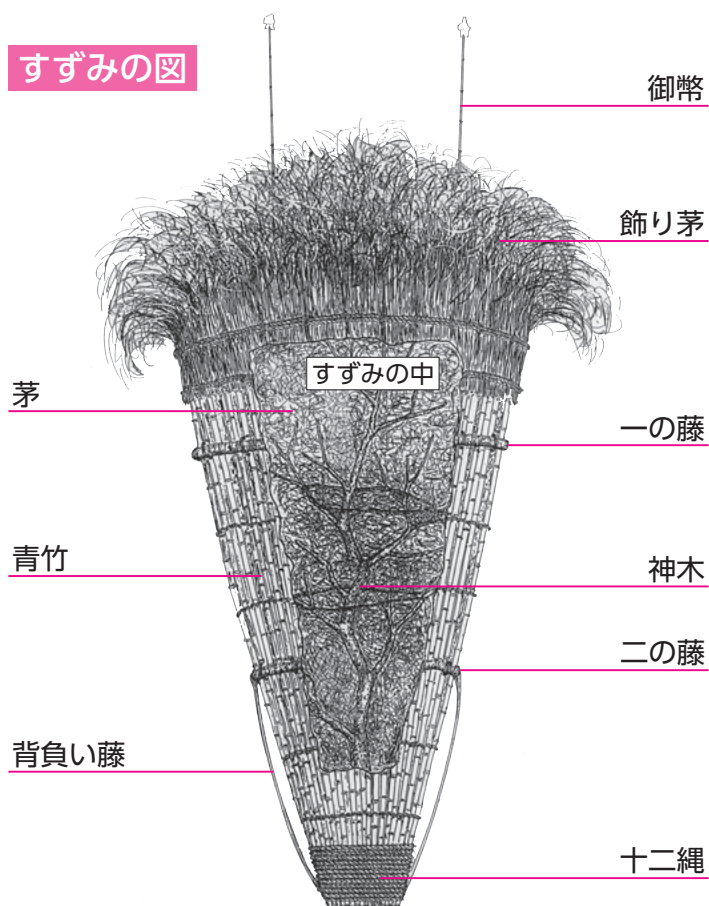
奉仕者は古くなった祭礼幟で作った装束を身にまとい、祭りに臨みます。すずみを燃えやすくするため、炎に包まれたすずみにつかまり、全身で揺る姿や、頭巾の形が猫の格好に見えることから、奉仕者は装束とともに「ネコ」と呼ばれます。



左上／昭和5年ごろの火祭りの様子。歴史と伝統がこの地で引き継がれ、現在に至ります 左下／同じく昭和5年ごろの様子。神男は水をかぶり、身を清めます 右上／すずみを立てるための穴を掘る神男 右中／青竹を簾状に編んだ状態。この上に茅を敷きます 右下／敷いた茅の中心に神木を入れます



すずみの図



1本の古い幟から大体1着の衣が作られます。

祭りのシンボル、すずみ

すずみは東西1基ずつ作られ、その高さは約5メートル、重さは約2トンに及びます。この巨大な松明に点火され、清々とした冬の夜空に火柱が立ち上るさまは、迫力満点。まさに祭りのシンボルです。

すずみを作るには、外側に巻く竹簾用の青竹60本2組のほか、竹簾を編むための縄や十二縄、化粧縄など多くのわら縄が必要となります。ま

た、すずみの中に入れる大量の茅も必要となるため、祭礼前までに鳥羽地区の各戸は茅を一荷ずつ、神社に納めます。ほかにも、神木になるアベマキ（地元ではトチノキと呼ばれる）、ゆすり棒になるクロマツ、火の粉を払うための「払い棒」になるヤマザクラ、火の勢いを調整するための「アテ棒」になるモチノキ、結束用の藤づるなど、たくさんものを準備します。1月中旬から祭日当日まで毎週日曜日に、氏子たちは材料集めに奔走します。

今年は旧暦のうるう年に当たするため、すずみやゆすり棒などは大きく作られます。



左上／完成した2基のすずみをどちらが使うか、神男がくじ引きで決めます 右上／完成したすずみを協力しながら運びます 右下／威勢のいい掛け声とともに、神社から鳥羽海岸へとみそぎに向かいます 左下／身を清めるため、極寒の海へ入ります



すずみ作りが始まり、祭りへの機運が高まる

祭り前日の午後1時、すずみ作りが始まります。まず、60本（今年は61本）の青竹を扇状に並べ、縄で簾状に編んでいきます。その上に茅を敷き、神木を中心に置きます。再び茅をかぶせて編んだ青竹で、す巻状にして綱でいったん締め、藤づるで2か所を固定します。固定した上の方を「一の藤」、下の方を「二の藤」といい、すずみが燃えるときの合図のめどとなります。

すずみの形ができると、2本1組のわら縄を12巻き（今年は13巻き）した「十二縄」を根元に付けます。十二縄は1年12か月を表すといわれています。十二縄にはすずみから取り出すための「背負い藤」を、すずみの上部には化粧として「飾り茅」を付けます。2基のすずみが出来上がるころ、公平を期するため神男はくじ引きを行います。

最後に、すずみの下に太い丸太を数本通し、神男が境内に掘った2つの穴まで、みんなで担いで運びます。並んで立てられると、はしごや丸太で固定され、2基のすずみはその時を待ちます。

極寒の海で、身を清める

祭りの当日の午後2時ごろ、花火

が上がると、関係者が神社に集まります。奉仕者は社務所で下帯姿に着替え、腹にはさらし木綿を巻き、頭には鉢巻を付け、白足袋を履きます。

午後3時、花火を合図に、奉仕者は「わっしょい、わっしょい」と勇ましく声を上げながら、神男と添え棒を先頭に約1km離れた鳥羽海岸へみそぎに向かいます。海岸に到着し、儀式を終えると、神男はじめ奉仕者は海に入り、沖へ向かって進んでいきます。沖では首まで海に浸かり、祭りの無事を願って身を清めます。

海から上がると、海岸でたかれる火で暖を取ります。神男と添え棒が、新しいさらし木綿などに替えて準備を整えると、来た時と同様に隊列を組んで神社に向かい、奉仕者はいったん家に帰ります。

燃えさかる炎に飛び込む男たち

午後6時を過ぎたころ、ネコの装束を着た奉仕者が続々と境内に集まってきました。火祭りを一目見ようと、観客も次々に押し寄せてきます。

午後7時30分、関係者全員でおはらいを受けた後、頭の上から降るように塩がまかれ、身を清めます。いよいよ、すずみへと向かいます。一対の高張り提灯と弓張り提灯、火打ち役を先頭に、神男と添え棒がゆすり棒を持ち、奉仕者が隊列を整えて、厳かにすずみへ進みます。すずみの前ではおらいが行われた後、火打ち



右上／身を清めるため、奉仕者たちに塩がまかれます 左上／すずみから神木を取り出そうと、間近に迫る炎へ果敢に挑みます 左下／すずみを激しく揺するネコに、大きな火の塊が降ってきます 右中／神木を拝殿前へと納める瞬間 右下／互いの健闘をたたえ、万歳で幕が閉じられます



の儀式を行います。火打ち石によっておこした火を、ゆすり棒の先に付けられたわら束に移し、すずみの上部に点火します。火は枯れきった茅をたちまち燃やし、すずみ最上部に付けられた御幣も燃えたと、奉仕者全員で万歳をします。火が一の藤あたりまで燃え移ったところ、太鼓を合図にゆすり棒をすずみに入れて左右に揺すり、燃えやすくなります。これが「一の棒」です。

水を掛けられた奉仕者は、すずみによじ登って激しく揺さぶり、燃える茅をかき出すように下へ落とし、燃え上がり、奉仕者は燃えさかる炎に果敢に飛び込みます。大きな火の塊が奉仕者に降りかかると、息をのんで祭りの行方を見守っていた観客からは歓声とどよめきが沸き、周囲は熱気と興奮の渦に包まれます。祭りが最高潮を迎える瞬間です。

半分ほど燃えたところに「二の棒」を、7割ほど燃えたところ「三の棒」を入れ、いよいよ神木と十二縄をすずみから取り出します。降り注ぐ火の粉と立ち込める煙の中、奉仕者は神木を引っ張り出し拝殿前へと納め、次いで十二縄も取り出し納めます。こうして福地と乾地両方が奉納を終えると、大勢の観客が見守る中、神男を中心に奉仕者が互いの健闘をたたえて万歳を唱え、祭りの幕が閉じられます。

今年の鳥羽の火祭り

問 西尾観光案内所 (☎57・7840／名鉄西尾駅構内)

時 2月12日(日) 午後3時～8時30分

※雨天時は2月13日(月)に順延

場 鳥羽神明社 (鳥羽町)

※名鉄三河鳥羽駅から徒歩約10分。

名鉄電車の利用促進にご協力をお願いします。

内 午後3時……鳥羽神明社からみそぎに出発

午後3時30分…鳥羽海岸でみそぎを行う

午後7時30分…神前で神事が始まる

午後8時ごろ…すずみに点火

神木、十二縄を神前に奉納

同時開催1 物産展「とば市」

時 2月12日(日) 午前11時～午後4時

場 名鉄三河鳥羽駅前

内 地元の名産品を集めた物産展。正午と午後3時30分から、各先着200人にあさりのみそ汁を無料配布

同時開催2 第41回はず夢ウォーク

詳しくは12ページをご覧ください。